

# 遺跡と道跡

—南九州の縄文時代早期を主として—

繁昌正幸

Prehistorical Sites and Traces of Paths

—A Case Study of Jomon Earliest Period in South Kyushu—

Hanjo Masayuki

## 要旨

遺跡の発掘調査で道跡が確認される例が増えている。遺跡は人々の生活の跡であり、人が生活する上には日常的にいろいろな場と場をつなぐ道は必要であり、確実にあったはずである。

これまでに確認された道跡およびそう考えられる遺構について、主として南九州の縄文時代早期に焦点を絞って見てみたい。

その際、民族例も参考にして、遺跡の調査で道跡を確認する手立てというようなものについても考えてみたい。

キーワード：縄文時代早期、南九州、コンターラインと痕跡

## 1 はじめに

上野原遺跡からは2本の道跡が確認されている<sup>1)</sup>。また、上野原遺跡と同時代の縄文時代早期とされるいくつかの遺跡からも、はっきりしないものも含めて道跡が発見されている。

人が住む以上、日常的に通る道は確実にあるわけであり、住居が数軒集まった集落であれば、当然人口も多いことが考えられることから、道が形成されるのは極めて自然なことであろう。さもなくば、毎回のように道筋を変えて行き来していたということになり、小動物でさえも、いわゆる“けもの道”を作ることからすると、動物以下ということになってしまい、それは不自然なことと言わざるをえない。そうであれば、遺跡には道が形成されるのが自然であり、発掘調査によって道跡が確認されることが本来は当然であると言える。

## 2 研究史

遺跡の発掘調査によって道跡およびそう考えられる遺構が確認された例は少なくはない。それは中世～近世を主とした、幅が約30cm～1m程度あるしっかりした硬化面を持ち、中にはカナケと呼ばれる雨などによる水分に含まれる鉄分が長期間にわたって固まったものも見られることがあることが特徴として挙げられている。また、中世を主として山城や低湿地などに石や木材を横にして敷いた跡とも考えられる凹凸のある遺構も検出されるところがあり、波板状遺構などと呼ばれている。

しかし、文献による研究となると、ほとんどなされていないのが実情と言えるようである。その中であって、律令時代における古代の駅路の調査およびその論考は傑出して盛んであると言える。(古代交通研究会の活動が特に顕著で

ある<sup>2)</sup>)

本県においては、平成4年度から県教育委員会によって行なわれた『歴史の道』の調査成果は、近世を主とするものとはいえ、本県の昔の道の調査という面からは画期的なものと言えよう<sup>3)</sup>。発掘調査による成果としては、山城跡と考えられる昭和53年度の山崎B遺跡(栗野町)内の裾を通る中世の主要な交通路と推定されている波板状遺構を持つ道跡<sup>4)</sup>や、平成10年度に出水筋を確認した東市来町の市ノ原遺跡(第3地点)<sup>5)</sup>、平成7年度に大口筋を確認した始良町の中原遺跡などが挙げられる<sup>6)</sup>。

縄文時代の調査では、平成10年度に晩期のほぼ一直線に延びる幅約1～2m程度の道跡が確認された吹上町の建石ヶ原遺跡のほか<sup>7)</sup>、本論で取り上げるように上野原遺跡・前原遺跡・永迫平遺跡・上山路山遺跡などの早期の遺跡が矢継ぎ早に調査されて、道跡検出のラッシュともいえるような状況を呈してきた。

これに伴って、論文等にも道跡の記載が見られるようになって来る。1996年度版『日本考古学年報49』には、集落との関連で道跡についての前原遺跡の記載があるほか<sup>8)</sup>、1995年度版の『同年報48』にも上野原遺跡での記載が見られる<sup>9)</sup>。当センター(旧センター。始良郡始良町所在)の設置に伴って結成された“埋文友の会”の第16回講座で池畑耕一が「発掘が語る道の歴史」として講演を行なった<sup>10)</sup>。

## 3 遺跡に見られる道跡

ここでは、上野原遺跡と同時期の遺跡ばかりでなく、それを遡る草創期、さらには旧石器時代の遺跡について、道跡及びその可能性のあるものについて交通路としての考え方から考察を加えてみたい。

つまり、遺跡の中での位置関係をもとに、道跡を中心に